

劉生容記念館

— 絵画、音楽、建築の三位一体をめざして —
父と子で作りに上げた芸術の理想郷

三船文彰（劉文彰）

絵が描ける人は教わらなくても、最初から絵が上手く描けるものらしい。それを世間では才能というのだろう。

劉生容(1928～85)という人は20歳になってから、それまで絵を描いたことがなかったにも拘らず、「今日から絵描きになる」と宣言し、その日から画家になったという、さらに珍しい能力の持ち主だったようだ。

没後33年、日本と台湾で唯一無二の画境を開拓した抽象画家・劉生容の人と芸術を振り返りながら、日本の岡山市に私が建設した「劉生容記念館」が20年を迎えるこの時期に、その果たしてきた役割と私設美術館の可能性を論じてみたい。

< 劉生容の生い立ち >

画家・劉生容は、波乱万丈でユニークな56年の生涯を過ごした。

1928年、まだ日本の一部だった台湾の台南県柳営の大地主の家に生まれた劉生容は、幼少から東京で一族とともに暮らした。13歳で父親と死別し、終戦直前の15歳の時にひとりで台湾に戻ることになるのだが、ちょうど太平洋戦争前後の歴史的な激動の時代に10代を東京と台湾で過ごしたことになる。

トモエ学園と玉川学園で自由で先進的な小、中学校教育を受けたこと、父親の愛好した西洋音楽に慣れ親しんだこと、さらに近くに住んでいた叔父の劉啓祥がパリでの絵の勉強で持ち帰ったルーブル美術館の名画の模写の数々を目にし、そこで西洋式的生活様式に触れたことなど、その後の劉生容の自由闊達な個性と西洋芸術への融通無碍の受容の基礎が築かれた。

1954年に筆者が劉生容の長男として生まれたのだが、1950年代の戒厳令の真ただ中、新営という台湾の田舎町で、絵を描き、伝書鳩を飼い、音楽を聴き、ヴァイオリンを弾き、ダンス・パーティを自宅で開き、多くの友人との交友を楽しむ父の豊かな日々を私は覚えている。多趣味で社交的で自由闊達な性格が、画家・劉生容の人間的な魅力として出会う人々を惹きつけていた。つまり父は生活においても創造的だったのだ。

< 東京での成功 >

20代前半にいきなり画家を生涯の仕事として絵を描き始めたものの、間もなく古色蒼然たる台南画壇の画風と決別し、独自に抽象画を試みるようになるも、世界の美術の潮流からはるかに離れた当時の台湾で抽象画を描くことに限界と息苦しさを感じて、1961年頃から小さい時に住み慣れた東京で創作と展覧会を行うようになった。

この時期に描かれた多くの大作は中国古来の焼金（亡くなった方を供養する時に焼く紙を金紙と言う）をコラージュし、その西洋と東洋の手法と美を融合した独創性と気迫に満ちた画風が識者を驚かせ、「東洋画壇の鬼才」と讃えられ、弱冠38歳で東京国立近代美術館や神奈川県立近代美術館などに作品

を収蔵されるまでになった。

<岡山市での創作活動>

その後、40歳の時たまたま縁が出来た岡山市に一家で移住、数年後に日本国籍を取得した。

家族6人が異郷で肩を寄せ合って生きる中で、画の創作に邁進する父の姿を身近に見て、子供たちもいつしか芸術の道に進んだ。次男の文裕は14歳でやはり突如絵筆を取り、半年後には父と父子展をするまでになり、妹はピアノ、私はチェロを習い、指揮者小澤征爾を育てた名教師、故斎藤秀雄氏の指導を受けるという幸運にも恵まれ、本職の歯科医療と並行して今日までチェロの演奏と音楽プロデューサーの活動を続けることになった。

<劉生容の芸術創作>

岡山の地で父は画風を進化させていた。

感性と偶然性に重きを置く西洋のアクション・ペンティングの手法を用いながら、その上に東洋の書の精神などの美意識を凌駕させ、緻密に計算した構図の中に中国古来の民間信仰で使用する金紙を配置した、立体的で万馬奔騰の如く進むエネルギーをキャンパスに定着した30代の取り組みから、平面的、幾何学的な展開を模索するようになった。金紙の使い方はさらに多彩になり、独自の朱色が多く用いられ、円と三角が主要なモチーフとなり、甲骨文までも取り入れ、天と人の関係など、東洋的な宇宙観の追及が深められていった。しかし、そこには哲学的でありながら、観念的ではない、時間と空間を感じさせる血の通った身体的な暖かさがあった。

岡山市で暮らし始めてからも盛んに個展を開き、日本の代表として国際的な展覧会に出品するなど、作家としての地位を着々と築いていったが、1985年、56歳の時に闘病空しく、脳腫瘍で亡くなった。

<「劉生容記念展」の開催>

父の残した絵を顧みる余裕がなく、没後10年が経とうとした頃に、台北市立美術館の頼瑛瑛氏がたまたま資料の中から劉生容の絵を見つけ出してくれたことで、頼氏の企画のもとで、1997年に台北市立美術館で「方圓之間—劉生容記念展」が開催された。それは数々の美術館に収蔵された作品をも集め、台湾の美術界に衝撃を与えた劉生容の作品の一大回顧展だった。

作品を年代順に見ていくことで、画家の表現、発想と手法の進化、変遷には連続した必然性があることがわかり、そこに立ち現れた優れた芸術家としての父の未知の姿に私は驚いた。

そして全作品を通して見て、父の創作にはすでに一つの起承転結が出来上がっていることを感じたことで、56歳という父の早い死に対しての長年の無念の思いから私はやっと解放されたのだった。

<劉生容記念館の建設>

この回顧展を契機に、父の絵をきちっとした形で収蔵する記念館を建てたいという気持ちがふつふつと湧いてきた。たまたま自宅の前に100坪ほどの理想的な土地を購入出来たこと、そして運よく建築家・佐藤正平氏との出会いもあり、夢が実現に向けて動き出した。

一年に渡るディスカッションの末、建物のコンセプトを「啓発（インスパイア）される空間」とした。同時に私が所有する1926年製の状態の良いスタインウェイのピアノもその空間で演奏出来るようにと、最終的には「絵画、音楽、建築の三位一体」というコンセプトに至った。

10か月間の極めて難易度の高いコンクリートの打ち放しの工事を経て、1999年5月に「劉生容記念館」が無事竣工した。

建物の4隅のコンクリートの中空円柱が中央の正方形のホールに接した幾何学的に完璧な構造は父の絵のエネルギーを増幅させ、私の自宅から移されたスタインウェイピアノを使用した演奏会では、絵と建物全体が楽器と共鳴し、聴く者の深い情感を呼び覚まし、天からのメッセージを受け取るような体験をもたらした。

人間が中に入ったことで、絵画、音楽、建築そして人の四位一体の世界が出現したのだ。

この四位一体の世界を成り立たせているものこそは、美を追求する人間のピュアな思いであることに思い至ったことで、「劉生容記念館」を芸術の力を追求する実験の場にしようと考えたのだ。

それから20年間、「劉生容記念館」であえて外に情報を出さない形で、私が厳選した一流の音楽家による演奏会が100回以上行われたが、世の喧騒から隔絶し、商業主義の対極に行くことによって、そこで多くのアーティストが父の絵と建物に啓発され、芸境を高め、聴衆は芸術を享受し、心躍る経験を積み重ねて行ったのだ。

その中でも、今年の春に93歳にして東京サントリーホールで奇蹟的なリサイタルを行ったアメリカの巨匠ピアニスト、ルース・スレンチェンスカ (Ruth Slenczynska) が「劉生容記念館」で15年間演奏を行い、芸術的な進化を遂げ、歴史に残る17枚のCDがそこから生まれたことは最大の成果となった。

絵に限らず、真の芸術は人間同士のピュアなご縁を結び、良き思い出を残すものでなくてはいけない、というのが20年来「劉生容記念館」での活動から得た私の結論だ。

父の絵の力に導かれた芸術の理想郷「劉生容記念館」で、これからもどのような美が誕生するのか楽しみだ。

参考文献

1. 「方圓之間—劉生容記念展」 臺北市立美術館刊
2. 臺南市政府文化局出版 美術家傳記叢書Ⅲ
劉生容〈甲骨文系列 No. 20〉 陶文岳著